

イエスのもつに来る者

ヨハネの福音書 6章 34-40節

はじめに

今日の聖書箇所は、イエス様が五つのパンと二匹の魚を増やして、五千人を満腹にさせたという奇跡を見た群衆とイエス様との対話が書かれています。

イエス様は 32-33 節で、「**わたしの父が、あなたがたに天からのまことのパンを与えてくださるのです。神のパンは、天から下って来て、世にいのちを与えるものなのです**」と言われました。父なる神様は、天からまことのパンを与えてくださる、そのパンとは、世にいのちを与えるものであると、イエス様は言われたのです。

そこで人々は、34 節で「**主よ、そのパンをいつも私たちにお与えください**」とイエス様に願うのです。今日の聖書箇所は、天からのまことのパンとはどんなパンなのか、そのパンを得るにはどうしたらよいか書かれています。

1. わたしがいのちのパンです

イエス様は 35 節で、このように言われます。「**わたしがいのちのパンです。わたしのもつに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません**」。神様が天から与えてくださるまことのパンとは、イエス様のことです。イエス様は、「わたしがいのちのパンです」と言われます。神様が天から与えてくださるまことのパンであるイエス様は、私たちに「いのち」を与えてくれます。私たちは今、「いのち」を持っています。今「いのち」を持っているからこそ、生きています。しかしイエス様が私たちに与えてくださる「いのち」というのは、私たちが今持っている肉体の「いのち」とは、別のもののようなのです。40 節では、「**永遠のいのち**」と言い換えられています。

では「永遠のいのち」とは、何でしょうか？ヨハネ 17:3 でイエス様は、「**永遠のいのち**」について、こう言っています。「**永遠のいのちとは、唯一のまことの神であるあなたと、あなたが遣わされたイエス・キリストを知ることです**」。イエス様は、「永遠のいのち」とは、唯一のまことの神様とイエス様を知ることでと言われるのです。「知る」というのは、ただ知識として知るという意味ではありません。処女マリアは、ある時こう言いました。「**どうしてそのようなことが起こるのでしょう。私は男の人を知りませんのに**」。この「男の人を知らない」というのは、「男の人を見たことがない」という意味ではなく、男の人と肉体的な関係を持ったことがないという意味です。つまり、聖書で言う「知る」とは、「交わり」を意味するのです。その意味で、「永遠のいのち」とは、唯一のまことの神様とイエス様との交わりに生きることなのです。そうであるならば、「永遠の死」とは、唯一のまことの神様

とイエス様と無関係に生きることであるのです。

私たちすべての人間は、生まれながらに神様とイエス様と無関係に生きています。その意味では、「死んでいる」のです。肉体的には「生きている」けれども、霊的には「死んでいる」のです。そのような私たちに、「いのち」を与えるために、天から遣わされて来たのが、イエス様なのです。

では私たちは、どうしたらその「いのち」を得ることができるのでしょうか。イエス様は、「わたしのもとに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渴くことはありません」と言われます。イエス様から「いのち」を得るためには、まずイエス様のもとに来なければなりません。なぜなら、私たちは生まれながらに、イエス様から離れて生きているからです。イエス様に背を向けて生きているからです。もし私たちが「いのち」が欲しいと願うなら、イエス様と向き合って、イエス様のもとに来なければなりません。イエス様は度々、「わたしのもとに来なさい」と言われます。有名なのは、「**すべて疲れた人、重荷を負っている人はわたしのもとに来なさい。わたしがあなたを休ませてあげます**」という言葉です。またイエス様は、ヨハネ 7：37-38 でも、「**だれでも渴いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになります**」と言われました。イエス様は、「いのち」が欲しいなら、疲れて重荷を負っているなら、また渴いているなら、「わたしのもとに来なさい」と言われるのです。

「イエス様のもとに来る」というのは、具体的にどういうことでしょうか。イエス様は今、この地上にはいません。今は天に昇られて、父なる神様の右の座におられます。今日の聖書箇所でも、先ほど読んだヨハネ 3：37-38 でも、「イエス様のもとに来る」ということは、「イエス様を信じる」ということに言い換えられています。つまり、「イエス様のもとに来る」ということは、「イエス様を信じる」ということなのです。私たちは、「いのち」が欲しいなら、疲れて重荷を負っているなら、また渴いているなら、イエス様を信じればよいのです。

イエス様が私たちに与える「いのち」は、決して飢えることがなく、どんなときにも、決して渴くことがないと言われています。イエス様が与える「いのち」は、決して飢え死にしまうようなものではありません。また喉が渴いて脱水症状で死んでしまうようなものではありません。決して「死なないいのち」なのです。それはもちろん、イエス様を信じれば、食べ物や飲み物に困るような生活にはならないという意味ではありません。決して、唯一のまことの神様とイエス様との交わりから絶たれることはないという意味です。ここでは、「決して」という強い否定が使われています。ギリシヤ語の原文では、否定を意味する「ウー」と「メー」という言葉が二重で使われています。「絶対に」という意味です。イエス様を信じる人は、「決して」「絶対に」、神様とイエス様との交わりから絶たれるようなことはないのです。それが「永遠のいのち」という意味です。

2. わたしを見たのに信じません

しかし36節を見ると、イエス様はこう言われます。「**しかし、あなたがたに言ったように、あなたがたはわたしを見たのに信じません**」。イエス様の奇跡を見た人々は、イエス様ご自身と、イエス様の奇跡を見たにも拘らず、イエス様を信じなかったのです。私たちは、イエス様を見たことはありません。イエス様の奇跡も目の前で見たことはありません。それでも今、イエス様を信じています。しかし私たちは時々思うのではないのでしょうか。イエス様を目の前で見て、イエス様の奇跡を目の前で見れば、多くの人がイエス様を信じるのではないかと。しかし、必ずしもそうではないようです。当時、イエス様ご自身を見て、イエス様の奇跡を見た人が全員、イエス様を信じたわけではないのです。「見たのに信じない」人がいたのです。キリスト教の信仰にとって、見る、見ないはあまり重要ではないようです。イエス様を見ても信じない人は多くいたし、イエス様を見なくても信じる人は多くいるのです。イエス様は、弟子のトマスにこう言われました。「**あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ないで信じる人たちは幸いです**」(ヨハネ 20:29)。私たちは、イエス様を見なくても信じることができます。イエス様のことばだけで、イエス様を信じることができるのです。イエス様の弟子のペテロは、こう言いました。「**あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、今見てはいないけれども信じており、ことばに尽くせない、栄えに満ちた喜びに踊っています。あなたがたが、信仰の結果であるたましいの救いを得ているからです**」(1ペテロ 1:8-9)。私たちは、イエス様を見なくても信じることができます。信仰とは、目に見えないものを信じるものなのです。

3. イエスのもとに来る者

とは言っても、私たちはなかなか目に見えないものを信じることはできません。そこでイエス様は、37節でこう言われるのです。「**父がわたしに与えてくださる者はみな、わたしのもとに来ます。そして、わたしのもとに来る者を、わたしは決して外に追い出したりはしません**」。「イエス様のもとに来る」というのは、「イエス様を信じること」だと先に言いました。では、どういう人たちがイエス様を信じるのでしょうか。それは、「父がわたしに与えてくださる者」です。つまり神様に選ばれた人たちです。神様に選ばれた人たちは、必ずイエス様を信じるようになるのです。私たちがもし、今イエス様を信じているなら、それは神様に選ばれたからです。私たちは、自分の力でイエス様を信じたわけではありません。神様の選びによって、神様の力によって、イエス様を信じることができたのです。

イエス様は、「わたしのもとに来る者を、わたしは決して外に追い出したりはしません」と言われます。イエス様を信じた人を、イエス様は決して捨てないということです。イエス様は、神様から与えられた人を、最後まで決して捨てないで守られるのです。私たちは、一度イエス様を信じると、その時からイエス様が私たちの信仰を守ってくださるのです。罪深いからとか、不信仰だからという理由で、イエス様は私たちを捨てたりしないのです。

4. 自分の思いを行うためではなく

なぜイエス様は、私たちを捨てないのでしょうか。それは、私たちを捨てないというのが、神様の「みこころ」だからです。38節でイエス様は、こう言われます。「**わたしが天から下って来たのは、自分の思いを行うためではなく、わたしを遣わされた方のみこころを行うためです**」。イエス様は、自分の思いよりも、神様の「みこころ」を大事にされる方です。その姿勢は、生涯の最後まで貫かれていました。イエス様は、十字架の死を前にして、父なる神様にこう祈られました。「**父よ、みこころなら、この杯をわたしから取り去ってください。しかし、わたしの願いではなく、みこころがなりますように**」(ルカ 22:42)。イエス様の願いは、十字架の死が取り去られることでした。しかし、神様のみこころならば、それに従いますと十字架の死に向かわれたのです。

自分の思いと神様の「みこころ」、私たちは絶えずその二つの間で揺れ動きます。しかしイエス様は、こう言われます。「**だれでも神のみこころを行う人、その人がわたしの兄弟、姉妹、母なのです**」(マルコ3:35)。イエス様は、私たちにも神様の「みこころ」を行うことを求めておられます。私たちの人生を突き動かしているものは何でしょうか。それは、「私の思い」でしょうか、それとも「神様のみこころ」でしょうか。「私の思い」「私の願い」「私の夢」「私の目標」を実現することが、私たちの人生でしょうか。それとも「神様のみこころ」を行うことが、私たちの人生でしょうか。少なくともイエス様は、「神様のみこころ」を行うことこそが、人生のすべてであったのです。

5. 終わりの日によみがえらせる

39-40節でイエス様は、こう言われます。「**わたしを遣わされた方のみこころは、わたしに与えてくださったすべての者を、わたしが一人も失うことなく、終わりの日によみがえらせることです。わたしの父のみこころは、子を見て信じる者がみな永遠のいのちを持ち、わたしがその人を終わりの日によみがえらせることなのです**」。神様の「みこころ」は、イエス様を信じる人たちを、イエス様が一人も失うことなく、終わりの日によみがえらせることです。

イエス様を信じる人たちは、終わりの日によみがえると聖書は教えています。イエス様はこう言われました。「**わたしはよみがえりです。いのちです。わたしを信じる者は死んでも生きるのです**」(ヨハネ 11:25)。イエス様を信じる人たちは、肉体的には死にます。私たちも、いつか必ず死ぬのです(もちろん、私たちが死ぬ前にイエス様が再びこの地上に来られる世の終りが来れば別ですが)。しかし、イエス様を信じる人たちは、イエス様がこの地上に再び来られる「終わりの日」に、必ずよみがえるのです。これが、イエス様が言われる「死んでも生きる」という意味です。「永遠のいのち」とは、肉体的に死なない「いのち」ではありません。死んでもよみがえる「いのち」です。死んでも、神様とイエス様との交わりの中に生き続ける「いのち」です。死んでも、神様とイエス様との交わりが決して絶たれない「いのち」です。

イエス様は、「わたしに与えてくださったすべての者を、わたしが一人も失うことなく、終わりの日によみがえらせる」と言われます。イエス様は、イエス様を信じる人を、終わりの日まで、一人も失うことなく守ってくださるのです。誰ひとり捨てることなく守ってくださるのです。イエス様は、イエス様を信じる私たちを生涯の最後まで決して飢えることなく、渴くことなく守ってくださるのです。そして死んだ後も、決して捨てることなく、決して失うことなく、終わりの日によみがえるまで守ってくださるのです。イエス様を信じる人を、終わりの日まで守る、それが「神様のみこころ」であり、イエス様の「使命」なのです。「永遠のいのち」とは、イエス様を信じた時から持つ「新しいいのち」です。神様とイエス様との交わりに生かされるいのちです。この「いのち」は、決して飢えることなく、渴くことなく、捨てられることなく、失うことなく、終わりの日まで必ずイエス様に守られるのです。それが「永遠のいのち」なのです。

おわりに

私は、14歳の時にイエス様を信じる決心をしました。しかし、信じる決心をするまでには葛藤がありました。それは、自分には生涯イエス様を信じ続ける自信がなかったからです。私は、生涯イエス様を信じ続ける「強い信仰」を持たなければ、洗礼を受けてはならないのだと思っていました。しかし私はある時、次のイエス様の言葉に出会いました。「**あなたがたがわたしを選んだのではなく、わたしがあなたがたを選び、あなたがたを任命しました**」(ヨハネ 15:16)。もう一つヨハネ 4:10の言葉も目に留まりました。「**私たちが神を愛したのではなく、神が私たちを愛し、私たちの罪のために、宥めのささげ物としての御子を遣わされました。ここに愛があるのです**」。これらの言葉を通して、キリスト教の信仰というのは、自分の信仰を強めることではなく、イエス様にお委ねすること、イエス様にお任せすることであることが分かったのです。生涯イエス様を信じ続ける「強い信仰」を持つことが大事なのではなく、生涯、自分の信仰をイエス様にお任せすること、お委ねすることが大事だということが分かったのです。

イエス様は、私たちの信仰を終わりの日まで、必ず守ってくださいます。私たちの罪のために十字架で死なれたイエス様は、私たちの信仰を命をかけて守ってくださいます。

イエス様はこう言われます。「**わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは永遠に、決して滅びることがなく、また、だれも彼らをわたしの手から奪い去りはしません。わたしの父がわたしに与えてくださった者は、すべてにまさって大切です。だれも彼らを、父の手から奪い去ることはできません**」(ヨハネ 10:28-29)。

皆さんは、「永遠のいのち」を欲しいと思いますか？この「永遠のいのち」は、イエス様を信じる時に誰にでも与えられます。イエス様を信じた時から、この「永遠のいのち」、神様とイエス様との交わりに生かされます。この「いのち」は、決して受けることも、渴くことも、失うことも、捨てられることもありません。イエス様が終わりの日まで、必ず守ってくださいます。

天におられる私たちの父なる神様。

私たちは、生まれながらにあなたから離れて生きている者です。それゆえに、飢え渴き、疲れ重荷を負って生きています。そのような私たちに、「わたしのもとに来なさい」「わたしを信じなさい」と招いてくださっています。そして「永遠のいのちを得よ」と言われます。私たちには、強い信仰はありません。小さな信仰しかありません。しかし、私たちの小さな信仰を、あなたが終わりの日まで守ってくださることを信じます。どうか、すべてをあなたに任せ、委ねますので、私たちを「永遠のいのち」に生かしてください。

この祈りを私たちの救い主イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。